十便十宜畫册小攷

脇本十九郎

一　小序

十便十宜畫册は南畫壇の雙星池大雅謝蕪村二家の合作に係り、その名は田竹田の船窗小戲帖を越えて喧傳し、實にわが國帖册畫の冠冕であると稱せられる。余はこの畫册の藝術的價値に就いて、幾度か考察を試みようとして、その度毎に失敗しては亦た筆を擱いた。蓋し池謝二氏の特色はこの畫册に於て遺憾なく發揮せられ、その構圖の巧妙にして、筆致の自在なる、殆ど言語に絶するものあり、强ひて評せんとすれば却つて畫を損せんとするからである。然るに頃日尙ほ懲りずまに把玩を續くる中にふと或る落想を得た。それは例の藝術的價値に就いてではなくて、畫册の作製乃至傳來等に關する文獻的資料に關するものである。思ふにこれしきの考證は夙に學者によつて爲されて居ることであらうが、未だ成文として發表せられたものを見ぬから、試みに一小文を草して、せめてはこの無價の寶に對する學徒の責任の一端を果したいと思ふ。

二　李笠翁と二家

およそ畫の作製せらるゝや、必ずその動機がある。池謝二氏が何の故に特に李笠翁の伊園十便十宜詩を取つて、これを無聲詩に飜譯しようとしたか。こゝにも動機がなくてはなるまい。

笠翁名は漁、もと明朝の遺臣にして、任俠意氣に富み、四方に流寓して志を得ず、遂に金陵に居り、文學に隱る。笠翁の號は蓑笠自ら江湖に漁するの意であるといふ。作中最も著はれたるは戲曲と小說とにして、風箏誤、愼鸞交、奈何天、憐香伴、比目魚、意中緣、玉搔頭、蜃中樓、巧團圓、鳳求凰これを笠翁十種曲といひ、何れも喜劇にして、滑稽諧謔の裡よく人情の機微を穿つを以て明淸過渡期の戲曲を代表し、また合影樓、奪錦樓、三與樓、夏宜樓、歸正樓、萃雅樓、拂雲樓、十巹樓、鶴歸樓、奉先樓、生我樓、聞過樓これを笠翁十二樓といひ、何れも短篇ながら、世道人心に裨補する所あるを以て旨とし、竝びに過渡期の小說に重きをなすといふ。その他詩歌、文章、塡詞、隨筆等、收めて笠翁一家言全集に在り、著想斬新、

行筆流暢を以て稱せられる。余は生來隣邦の文學に晦く、未だ笠翁の全體に通ずる機會なきも、往年、全集收むる所の偶集の間情偶寄と改題して德川期に於て飜刻せられたるを讀み、轉たその思致の奇にして、趣味の却つて俗なるに驚いたことがある。一例を擧ぐれば、その杭州西湖の濱に寓するや、一湖舫を構へて、扇形の窗を作り、內より外を見れば自然は是れ一幅便面山水、外より內を見れば舫中の人は直ちに是れ便面人物と云へるが如きは、尙ほ忍ぶべし。その居室に尺幅窗とて裱褙の狀を象れる窗をしつらへて庭中の景物を畫幅視せんとし、又は梅牕とて天然のまゝに枝付きたる梅樹を窗格として用ふるなど、比々兒戲に類するを見る。只だわが池大雅にも斯かる奇癖が全然無かつたとは言ひ難い。嘗て京都の大雅百五十年記念展觀に、大雅堂見取圖の出陳せられたるを見るに、妻玉瀾の葛蕈居と棟續きなる堂の入口には、玄關の二字を書きたる四角の暖簾を掛けたり。これは何でもなけれど、前はやゝ廣き園囿にて、上手梅林より正面茶畑に連り、花壇を經て、下手大松樹の下に門あり、「此門より御通り可被下候大雅」と標すといふ。これも亦た何でもなけれど、花壇の右、堂に近く點々沙を畫ける方形の一區畫あり、これぞ無蓋の畫席であつて、「大作は快晴に此所にて認む」と註したるこそ面白けれ。げに池翁ならでは思ひ及ばざる奇想で、堂中の狹さも從つて想ひやられるのであるが、これを笠翁の尺幅窗、梅牕の類に較ぶれば、雅俗同日の比にあらざるを覺える。

しかし寬裕なる大雅は笠翁の下俗なる思想をも笑つて容し得たであらう。しかも大雅が笠翁に傾倒するに至つたに就いては、別に一事あるを忘れてはならぬ。それは言ふまでもなく當時南畫人の津梁たりし芥子園畫傳が、笠翁の論定によつて上梓を見、笠翁これが序をも作つて居ることであつて、若し忖度すらくは大雅夙く祇南海より芥子園畫傳を授けられた時（一說には芥子園畫傳にあらず、蕭尺木畫譜、又は沈無名畫譜なりといふ）笠翁の名を記憶して、遠くその人となりを偲び、後また笠翁集を見るに及んで、いよ〳〵その人の奇なるに興味を感じて、さてこそ年長の畫友蕪村を語らひ、畫冊の建立を思ひ立つたのであつて、言はゞ伊園便宜詩を喜ぶことよりも、寧ろ我國畫壇の恩人たる笠翁を記念する意味に於て彼詩を取上げたのではあるまいか。

三　十便十宜詩

芥子園畫傳は康熙十八年の序を有し、傳の如く池翁三十歲の時祇南海よりこれを得たりとすれば、寶曆二年以前已に舶載したことが知られる。いな、そのやうな手ぬるき穿鑿などしたらむには識者に嗤はれるであらう。何となれば芥子園畫傳の始めて我國に舶載せられたるは夙く物徂徠の時に在り、（一說）またその始めて飜刻せられたのは、實に寶曆三年の事に屬し、若しや平安書肆河南樓をそゝのかせた者が、大雅蕪村などであつたかも知れぬからである。（彫工は京都紙屋川に住する山本喜兵衞と稱する者であつたが）笠翁一家言全集の上梓はやゝ畫傳に後れて、雍正八年以後に屬するが、そはともあれ、伊園十宜及び十便の詩は集中の笠翁詩集卷七に收めてある。余は今その原詩と池謝二氏の畫上に寫出

せるものとを對校して、こゝにも池翁の無頓著ぶりを發見する。卽ち眺便一首に在りては起句と轉句とに於て各一字宛の誤寫を見るのであつて、或は故意の改刪か、それとも九方皐を誤つて方九皐としながら、生涯を通じて更めようともしなかつた例の雅懷に歸すべきか、（大雅所用の遊印に「前身相馬方九皐」の六字を陽刻する者がある。便帖の各頁に押す者これである。この句は宋の陳興義の墨梅贊「意足不求顏色似、前身相馬九方皐」から出て居る）恐らく後者を以て眞に近しとすべきであらうが、今、余は單にその異字のみを指摘する代りに、十便十宜兩詩を原詩によつて左に寫出するのは、畫冊の文字往々磨損讀み難きを救ひたいのである。

○伊園十便有小序

伊園主人結廬山麓、杜門掃軌世若遺、有客過而問之曰、子離群索居靜則靜矣、其如取給未便何、主人對曰、余受山水自然之利、享花鳥慇懃之奉、其便實多、未能悉數、子何云之左也、客請其目、主人信口答之、不覺成韻。

耕　便

山田十畝傍柴關、護綠全憑水一灣、唱罷午雞農就食、何勞婦子饁田間。

課農便

山窓四面總玲瓏、綠野青疇一望中、凭几課農農力盡、何曾妨却讀書工。

釣　便

不蓑不笠不乘船、日坐東軒學釣鰲、客欲相過常載酒、徐投香餌出輕鷖。

灌園便

築成小圃近方塘、菓易生成菜易長、抱甕太癡機太巧、從中酌取灌園方。

汲　便

飛瀑山厨止隔牆、竹梢一片引流長、旋烹佳茗供佳客、猶帶源頭石髓香。

浣濯便

浣塵不用繞溪行、門裏潺湲分外清、非是幽人偏愛潔、滄浪引我濯冠纓。

樵　便

臧婢秋來總不閒、拾枝掃葉滿林間、拋書往課樵青事、步出柴扉便是山。

防夜便

寒素人家冷落邨、祇憑泌水護衡門、抽橋斷却黃昏路、山犬高眠古樹根。

吟　便

兩扉無意對山開、不去尋詩詩自來、莫怪囊慳題詠富、只因家住小蓬萊。

眺　便（樂之軒云、起句「山」大雅作「子」、轉句「興」作「目」）

叱羊仙洞赤松山、一日雙眸數往還、猶自未窮千里興、送雲飛過括蒼間。

○伊園十二宜

宜　春

方塘未敢擬西湖、桃柳曾栽百十株、只少樓船載歌舞、風光原不甚相殊。

宜　夏

繞屋都將綠樹遮、炎蒸不許到山家、日長閒却羲皇枕、相對忘眠水上花。

宜　秋

門外時時列錦屏、千秋非復舊時青、一從澆罷重陽酒、醉殺秋山便不醒。

宜　冬

茂林宜夏更宜冬、禦却寒威當折衝、小築近陽春信早、梅花十月案頭供。

宜　曉

開窗放出隔青雲、近水樓臺易得昕、不向池中觀日色、但從壁上看波紋。

宜　晚

牧兒歸去釣翁休、畫上無人分外幽、對面好山纔別去、當頭明月又相留。

宜　晴

水淡山濃瀑布寒、不須登眺自然寬、誰將一幅王摩詰、曬向當門倩我看。

宜　陰

煙霧濛濛莫展開、好詩憑著黑雲儂、捲簾放却觀天眼、多少奇峰作意來。

宜　雨

小漲新添欲吼灘、漁樵散去野蓑寒、溪山多少空濛色、付詩與人獨自看。

宜　風　樂之軒云、燕村作「鳥」起句「鳥」

烏歸芳樹蝶過牆、花與隣花貿易香、聽罷松濤觀水面、殘紅皺處又成章。

四　十宜か十二宜か

未だ笠翁の詩集に就かれざる人も、既に就かれたる人も、等しく必ずや右に寫出した伊園便宜兩詩の中、宜詩の命題が十宜でなくて十二宜であることを訝しと思はるゝであらう。殊にその題の十二宜とあるに拘らず、詩そのものが十であることは愈〻疑惑を深からしめる。しかし之に就いては先輩既に說を試みて居るのであつて、雜誌國華（第三百四十四號）が岩崎家本十便十宜帖を載せた時、歸鞍生なる人解說して「凡そ十便十宜の詩は淸初の李笠翁の製する所にして、翁がその別業伊園にありし頃の作なるが、一家言全集には十二宜の詩とあるも、晦明二宜の詩は之を缺けり」とあるのがそれである。右の說は一見頗る要領を得たる如く思はれ、余亦た嘗て漫然その說に盲從した日があつたが、しかも歸鞍生の所謂晦明の二字、その出處極めて不明。しかも更めて笠翁詩集を繙くに至つて、十二宜は遂に十宜の誤に過ぎざるを知つた。いま少しくこれに就いて委しく記せば、十便十宜詩には原本、王茂衍、吳修蟾、李仁熟、熊獻、鄭房季、尤展成、顧赤方、沈因伯等の批評が加へられて居るのであつて、その中、沈氏は評して「家岳嘗對予云、韻人討便宜處、全在人棄我、取風雨晦明四字、我有其三、與人同者只一明字耳、觀陰雨二詩可見」と言つて居る。（因にいふ、芥子園畫傳序中、家倩因伯といへる如く、沈氏は笠翁の壻であつて、翁病みて眞山水を觀るを得ず、畫山水を觀んとすれば觀畫の法を解せざるを奈何。因伯に問ふに、因伯乃ち先世遺す所の李流芳の譜並に蠹に金陵に在る頃王槩をして選ばしめたる一帙を以てす。笠翁大に喜び、更に編次を重ねて上梓せしめたるもの、やがて芥子園畫傳山水篇である。こゝに於てか知る十宜詩沈氏評中、家岳といへるは卽ち笠翁であつて、風雨晦明云々の廿字は、世間の人情只だ明卽ち晴をのみ愛するも、吾は風、雨、晦等天象の變化みなこれを愛すると告げた笠翁の一家言を紹介したのである。風雅の人誰か風雨を喜ばざらんや、こゝにも笠翁の獨斷がある。）疑ふらくは晦明二字はこの文に胚胎する所なきか。しかも思一思すれば晦明は畢竟陰晴といふと同じであつて、陰晴二宜は則ち十宜の中に收めてあるから、十二宜は十宜の誤と斷せざるを得ない。然らば十宜を十二宜とした命題（目次また然り）の誤は如何にして生じたかといへば、恐らく書寫の誤に歸すべきであらう。卽ち更に明らさまに言へば笠翁の稿本に於ける十宜二字の書體が草書なりし爲め、宜字の「ウ」冠が「二」字と化し、ツクリの「且」が「宜」字として發展するに至つたものと解せられる。歸鞍生が「十二宜の詩とあるも晦明二宜の詩は之を缺けり」といへるは、燕村が特に十便と相對する爲めに、故らに二詩を省いたといふ意味にも取られ易いから、旁〻一言を辯じて、退いて識者の敎を待ちたいと思ふ。

五　內容の排列

更に一言を費すべきは今の畫冊の內容の排列順序である。烱眼なる讀者は既に心附かれたことと思ふが、今の畫冊の內容には前後轉倒がある。卽ち畫冊と原詩とを比較對照すれば、順序に左の異同あるを發見する。

○十便　　○十宜

（畫冊）	（原詩）	（畫冊）	（原詩）
一、耕便（小序あり）	耕便	一、宜春	宜春
二、汲便	課農便	二、宜夏	宜夏
三、浣濯便	釣便	三、宜秋	宜秋
四、灌園便	灌園便	四、宜冬	宜冬
五、釣便	汲便	五、宜曉	宜曉
六、吟便	浣濯便	六、宜晚	宜晚
七、課農便	樵便	七、宜晴	宜晴
八、樵便	防夜便	八、宜風（款記あり）	宜陰
九、防夜便	吟便	九、宜陰	宜雨
十、眺便（款記あり）	眺便	十、宜雨	宜風

回顧すれば余が始めて十便十宜畫冊に接したるは、今より十七年前、大正九年冬十一月であつて、當時余は十便帖には第一耕便圖に小序ありて、第十眺便圖に「霞樵無名寫意」の款記ある爲め、何等排列に關して疑を挾まず、しかも十宜帖は第八頁宜風圖に「明和辛卯八月寫謝春星」の款記ありて、最終の宜雨圖却つてこれを缺くを奇しとしたのであつたが、右の排列對照を試みるに至つて疑團忽ち氷解した。

それならば右の錯簡は何時生じたかと問へば、余は池謝二氏の歿後であると答へる。そも〳〵十便十宜帖は池翁十便圖を作り、謝氏十宜圖を畫いて、こゝに端なくも松花堂昭乘、狩野探幽二家が林羅山を行司として、彼一畫此一圖、一卷の卷子を挾んで龍虎相搏つ壯觀を演じたる以來の、いなその內容に至つてはそれ以上の興行となつたのであるが、頭初の體裁は必ずしも今日見るが如きものではなかつた。卽ち十便帖の卷頭に增山雪齋が「聯璧」の二字を題字として加へたのは、大雅歿後十一年、蕪村歿後四年、やがて畫の成れる明和八年よりすれば十六年の後、天明七年であつて、更に長三洲が各冊の表紙に「池霞樵十便畫冊」「謝春星十宜畫冊」の題簽を加へたのは、又その後と考へられるから、排列の錯誤はこれら兩度の改裝の何れかの時に行はれたものと考へられる。

六　十便十宜帖三本ある說

以上說く所によつて、余は畫冊作製の動機を考へ、十二宜詩の十宜詩なるべきを考へ、また今の畫冊の排列を正して、何時の日かその原形に復原せらるゝ日の來らんことを豫想する者であるが、この畫冊と相關聯して、尙ほ一事言はざらんと欲するも能はざる一事がある。何ぞや、十便十宜畫冊は池謝二氏によつて三本を作られたといふ謬說に就いてである。

十便十宜畫冊三本說の根源は、前記雜誌國華所載岩崎家本の跋語に在る。曰く、

大雅蕪村兩翁沒後四十年、其蹟年々並貴重、其價日々並騰踊、以故人之贋之者多於天下、而其眞者不能居十之一矣、然風韻之逸、水墨之奇、豈可贋乎、豈可贋乎、兩翁一日相醉相欽、遂作十便十宜圖三帖、一帖爲鳴海餘延年藏焉、一帖爲浪華木世肅所收焉、此帖卽其一也、是自希代寶、觀者宜以此爲照眞贋之鏡、青陵海保鶴。

この跋語によれば（辭句は一に國華に從ふ）兩翁は一日相醉うて相欽び、三本の十便十宜畫冊を成したのであつて、兩翁歿後四十年を經たる文化の頃、

三本のうち一本は尾州鳴海なる餘延年の家にあり、一本は大坂木村兼葭堂にあり、殘る一本は今岩崎家に傳ふるもの是なりといふのである。

海保青陵は江戸の儒者、名は皐鶴、京に出でて講說し、文章を能くす、文化十四年六十三歳にして歿す。右の記述は一見當時好事者の間に行はれたる風說を取つて材とせるものの如く、殆ど疑ふべき餘地無きが如く見えるが、その實は甚だ怪しむべき點がある。まづ「一日相醉うて」といふ、その「一日」の二字は、後の「三帖」まで係りて、一日能く三帖を作つたかの如くにも解せられてをかしいが、それは暫く措いて、三帖を作つたといふ其事に疑を挾むのである。勿論一人の作家が同題同圖を以て二通或は二通以上の畫を作ることは、往々にして見られる例であらう。故に右の跋語を讀んだばかりでは疑を挾むべき餘地を見ないのであるが、その跋語を載せた岩崎家本と、今われらが當面の主題とする千原氏舊藏本とを細かに對照するに於ては、苟くも繪事を知る者である限り、大いなる疑惑を感せざるを得ない。

事少しく煩雜に亙るが、余が舊千原家本に始めて接したるは前に述ぶるが如く十七年前であるが、それよりも遙かに早く同本の複製は關西方面に於て二種までも作られて居て、われらはその圖樣に通曉して居たのであつた。さればこそ岩崎家本が國華誌上に紹介せられた時、余は逸早くその眞贋に就て疑を有つたのであるが、その後間もなく岩崎家本が國華社によつて丸ノ内の某所に於て展觀に供せられ、親しくこれと相對する機會を得るに至つて、いよ〳〵岩崎家本の贋本たるべきを確認するに至つた。思へ、同一作家が同一圖樣を作ることは往々にして有り得るが、その場合尙ほ且つ作家は何處にか變化を求め、決して文字通りの同圖樣を作ることを屑しとしない。それは猶ほ能ある書家が一幀中に同一結體の文字を重用するのを避けると一般の心理に依るのであつて、他家の畫を一點一畫そのまゝに再現せんことを期する摸寫、臨寫とは著しく趣を異にする。然るに岩崎家本十便十宜帖は、畫といひ、書といひ、言はゞ舊千原家本の一點一畫を逐うて及ばざらんことを恐るゝ者であつて、何條池翁といひ謝氏といふが如き大家の爲し得る姑息卑屈の手段であらう。況んや岩崎家本は書といひ畫といひ、これを舊千原家本に比するに墨氣筆情共に數等を下り、臨摸に共通の弊所として神氣貫通する無く、この點に於てこれを支離滅裂といふも强ち過言ではない。換言すれば岩崎家本は遺憾ながら一箇の摸本又は臨本である。余は斯くて跋語の作者たる海保氏を以て直ちに贋物作家又は惡骨董肆に與した者とはしないが、跋文の中に池謝二氏の畫の眞贋甄別し難きを口にしながら、しかもみづから誤鑒に陷つて居ることを憐みたく思ふ。然らば斯かる贋本は如何にして作らるゝか。

七　梅厓の臨本

贋本の作らるゝ場合は、およそ二樣に分けて考へられる。一は始めから贋本を作る目的を以てする場合であつて、他は善意の摸本又

は臨本が何時しか惡骨董肆等によつて贋本化せられる場合である。前者は始めから印記をも摸捺するを常とし、後者はそれが贋本化せらるゝ時に至つて始めて摸印を加へられる。さうして普通の例としては、その摸印は原本の眞印と形を同じうするのであるが、稀には故らに別の印を用ふることもある。今岩崎家本十便十宜帖の場合は池謝二家とも原本のそれとは異なる別の印記を捺用して居るのであるが、その印記どもが亦た池謝二氏の用ひた同形同文の眞印と符節相合しないのは更めて言ふを須ひぬ。さらばこの岩崎家の贋本は何時の時代に誰の手によつて作られたのであらうか。始めから贋本を目的として作られた第一類の贋本であらうか、それとも善意の摸本臨本（摸本臨本である間は印記は省かれて居るか、若しは毛筆を以てした臨摸であつて、鐵筆を借りたものではないが）が後に贋本化された第二類の贋本であらうか。余はこれに對して答ふるを得ないが、只だ茲に嘗て十時梅厓の十便十宜帖摸本ありしことを、金井烏洲の無聲詩蛆（無聲詩話の姉妹篇にして、安政元年男之恭の校するところ）によつて知り得るは興深い。

十便十宜圖

是爲浪華雲耕翁藏、斎大雅蕪村所俱畫也、蕭遠疎放秀潤之氣、入人眉睫間妙甚、予始視而不識爲臨撫本、及讀跋語、忽知爲十時梅崖（マヽ）筆、而咄々逼眞、可謂出藍之手、賞鑒之餘、予亦臨寫一過、輙云、予畫欲求駿足于驪黃外者、不知世有九方皐否、天保壬辰首夏、識林氏之寓依、烏洲

十便原大雅所圖、十宜卽蕪村所筆、俱爲合作矣、余臨之過、蓋運筆之間、索神韵乎形似之外、不必規々于原本、此所謂學魯男子者、具眼者其能識之矣、寛政辛酉正月初五日、梅厓識于米巷清夢軒。

余は敢て今の岩崎家本を以てこの梅厓の臨本が後に海保青陵の跋を加へて贋本化されたと斷言する者ではない。只だ烏洲の記によつて十便十宜畫冊は少くとも寛政の頃十時梅厓によつて臨摹せられ、烏洲またこれによつて轉寫を試みたる事實あるを知り、若し利を求むる輩がこれらのものを惡用せんとすれば、事易々たるのみであつたことを指摘し得れば足れりとするのである。果して岩崎家本以外にも十便十宜畫冊の異本と傳ふるものは、他にもこれあるやに聞く。海保青陵が三本ありと擧げたる三本中の他一本の如きも、贋本たること固よりであつて、若し眞本ならば舊千原家本とは當然圖樣または筆致傳彩等に於て著しく趣を異にする者でなくてはなるまい。

八　千原家舊藏眞本の傳來

飜つて唯一眞本十便十宜畫冊たる千原家舊藏本は、本來、何處に在り、將たその後如何の徑路を辿りて今日に至つたか。是れ亦た淺聞寡讀の余の得て知り難しとする所であるが、その天明七年の頃、雪齋のいはゆる學海平兄なる者の藏庫に在りたることは、雪齋が前記「聯璧」の題字に添へて、「丁未夏六月三日爲學海平兄書」の款記を記して居るのでわかる。學海は雪齋が伊勢長島城主なるに見て、或は亦た伊勢の人ならざるかを疑つたが、三成重敬君がそれは漆山天童君が知つて居るかも知れぬと、聞いて吳れて見ると、下鄕次郎八、字は君栗、莓苔園とも號し、平姓で平寛を以て稱した、安永天明頃の名古屋の「藝苑家」であることがわかつた。こゝまで分つて

大雅、蕪村筆　十便十宜圖之內

大雅筆　耕便圖

同　汲便圖

同　浣濯便圖

同　灌園便圖

同　釣便圖

同　吟便圖

大雅、蕪村筆　十便十宜圖之內

大雅筆　課農便圖

蕪村筆　宜春圖

同　防夜便圖

同　宜夏圖

同　眺便圖

同　宜秋圖

大雅、蕪村筆　十便十宜圖之內

蕪村筆　宜冬圖

同　宜曉圖

同　宜晚圖

同　宜風圖

同　宜陰圖

同　宜雨圖

見ると、今少し委しく調べて見たくもなるが、折ふし郷里山口に歸省したので、暫く以上を以て滿足する外はない。若し海保氏の記すが如く兼葭堂に十便十宜畫冊ありしとせば、それは眞本以外の何物でもあり得まいから、學海の手を離れて兼葭の手澤を留むるに至つたとせねばならぬが、それさへ今余は不幸にしてこれに對する證據を握り得ない。（雪齋と兼葭堂と梅厓と、この三人の間には或る關係がある。卽ち兼葭堂は家產を蕩盡した時、雪齋に招かれて長島に往き、封內五瀨の地六百步を與へられて、其處に居つたことがあり、梅厓は宋學を好み、經義を以て雪齋に聘せられ、長島藩の文敎頓に興つたと云はれて居る。梅厓が十便十宜帖を臨したのは寬政十年長島藩を致仕して後三年寬政辛酉の歲であるから、當時十便十宜帖が尾張に在つたと考へるよりも、移つて大坂の兼葭堂に在つたと考へ易いが、海保氏の記以外に旁證の得られないのは聊か心もとない。また海保氏が鳴海餘延年の許に在ると記したのも、實は舊聞を錄したのみで、その餘延年本と兼葭堂本と同本であるのではないかとも想像し得る。餘延年は雪山廣澤の兩傳たる二老略傳及び風塵餘筆の著者として知られて居るが、その序には安永の年紀があるから、右の想像を綜合すると、安永の頃まで尾張餘延年の許にあつた十便十宜畫冊が、天明中には同州平學海の有に歸して始めて雪齋の題字が添へられ、更に再轉して寬政の頃兼葭堂の藏として大坂に移つたことになるが、果して然りや知る由もない。）

たゞ此帖、明治初年千原家に在りしことだけは、今もその箱表に「宜春亭」の名を載するによつて明々白々であるが、更に加賀松任の人蕪城秋雪の雲煙逸話（外集として香草墨緣あり）によつてその間の消息を窺ひ得る。曰く、

> 蕪村ノ畫、近日其眞蹟ヲ見ルコト尠シ、友人千原華溪氏ノ藏十便之帖、蓋シ初年ノ作ナリ、其畫溫潤和雅、甚ダ韵致アリ、是レ南派正統ニシテ、後人ノ摹範トスベキ者ナリ。

十宜を誤つて十便としたのは不測の誤であるが、千原氏を呼んで友人と云つて居る所に記載の强味がある。蓋し近世書畫收藏史上、千原氏と稱する者は二人ある。一は兄夕田（名は誠、字は明卿、また放浪子と號す）であつて、他は卽ち弟華溪（名は信、宜春亭と號す）である。兄は豐州日田に住み、弟は後に東京に出でゝ、賞鑑第一の名を得た。余や性急、嘗て岩崎家の名幅として知らるゝ倪元璐の山水以下明代巨匠の製作山の如く豐富なるは、多く一括して千原氏より移ると聞いて、（豐繪詩史に據れば、これら千原氏收藏の明畫はもと吳中人長髮賊の亂を避けて長崎に來り鬻ぐといふ）十便十宜畫冊亦た此時に從うて入るとのみ臆斷して居たのであつたが、何ぞ知らん、眞蹟十便十宜畫冊は岩崎家に入らず、千原家を出でて直接か間接か西して明治末葉、岡山坂本氏（名ハ金彌）次いで、大坂大島氏（名は甚三）の許に在り、更に大正年間同市松本氏（名は松藏）の藏奔に歸し、最近また西して下關桝谷氏（名は音三）の寶庫に入つたのである。

九　結　語

あゝ、名畫を說いて區々の俗話に及ぶと雖も、材幹短くしてその美所に突入する能はず、止んぬる哉。田竹田、その山中人饒舌に於ていふ、

> 世稱鑒賞精覈者、引證古今、鑿々辨證、而往々有披沙失金之譏矣、東山月峰上人善鑒池翁、常語余曰、眞跡甚佳者、僞造甚拙者、一覽輒知、不俟人言、特至遇眞跡稍劣、與贋造甚工、涇渭混矣、以僞爲眞猶可、以眞爲僞大不可、蓋翁跡日損月減、而無復有增、可不愛惜乎、鑒者最宜著眼留意、不可放過、可謂篤論哉。

と。月峰をして言はしむれば、余の如きは何とか言はん。慚々愧々。